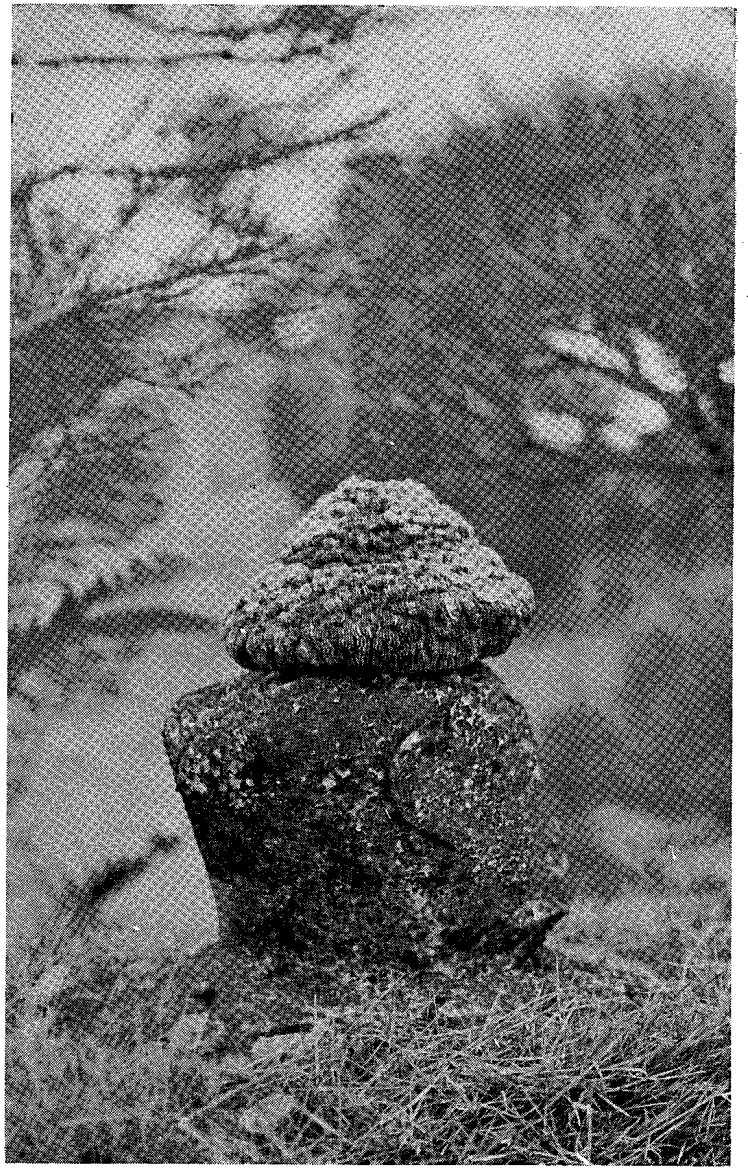
慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

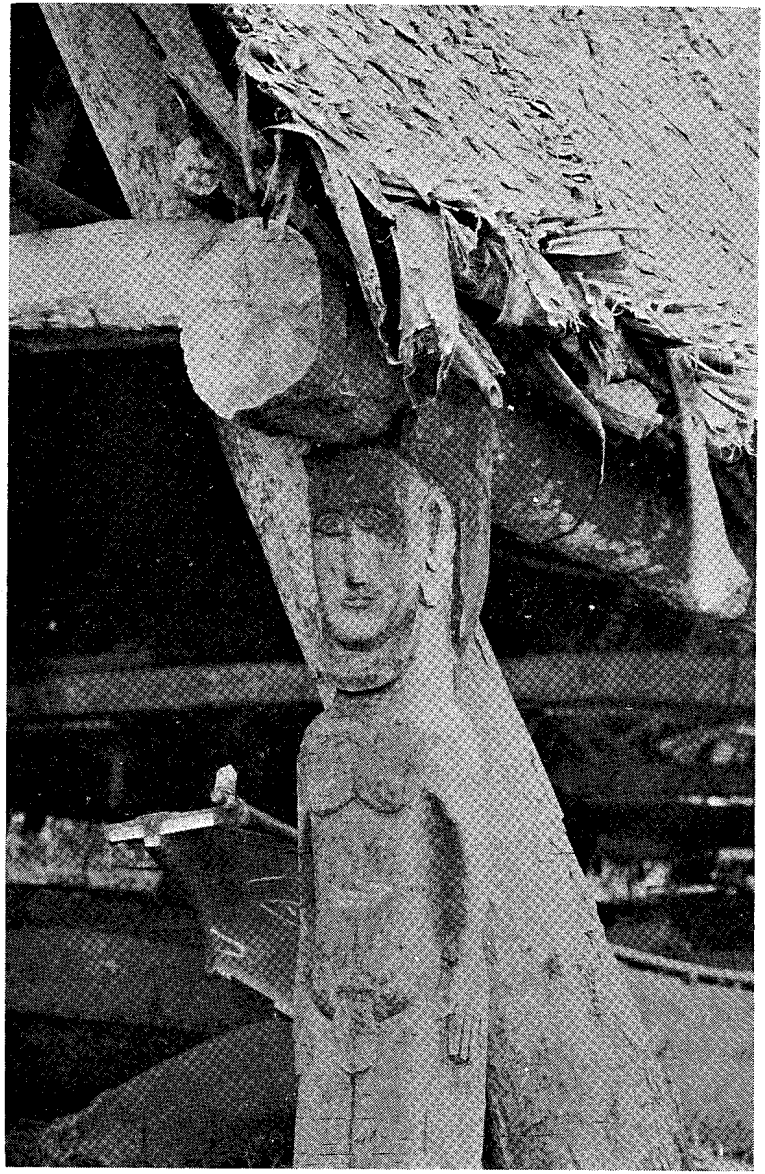
Title	南洋群島旅行日誌 : サイパン・ ヤップ・ パラオ・ ニューギニア
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.77a(405a)- 109(437)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿圖:南洋廳パラオ支廳前の石首, コロール島カヌー小屋の入口柱
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



南洋廳パラオ支廳前の石首



コロール島カヌー小屋の入口柱

南洋群島旅行日誌

（サイパン・ヤップ・パラオ・ニューギニア）

松本信廣

我南洋群島が太洋州中ミクロネシアと呼ばれる一區劃でポリネシア、メラネシア、インドネシアと相並び、人類學民族學の寶庫として世界の學者の興味を惹いてをることは云ふまでもない。大正三年我國の占領以前同群島の領有者であつたドイツはハンブルグ民族學博物館を中心とする南洋學術調査團を遣してクレーマー、ミュラー等の民族學者がパラオ、ヤップ等の島民に就て綿密周到なる浩瀚な報告書を出版してをる。然しながら我國の占領以來既に四半世紀に垂としながら同群島に對し邦人學者による未だ確固たる民族學的研究が試みられず、また同島々民の土俗品を蒐集する民族學博物館の設備もなく、貴重なる資料が空しく湮滅四散の狀態にあるは實に遺憾と云はねばならぬ。之を周圍の諸島が年々歳々歐米學者の幾多の業績により漸次闡明されつゝあると比較して誠に一等國の面目上忸怩たるものがある。同群島在住の邦人の中二三篤志な研究者の名を聞かぬでもないが然し中央學界と現地とを聯絡し、緊密なる研究組織を形成することはあくまで必要であるので、南洋興發株式會社所藏メラネシア土俗品の整理をしてゐた「南の會」同人は、同會社及び其他

の後援により今夏の休暇を利用し南洋群島の第一回民族學調査團を組織し、主としてマリアナ、パラオ方面の調査をなすこととした。一行四名、七月十二日五千五百三十三噸の新造船サイパン丸で横濱を出帆する。船は觀光客と移民とで超滿員、足の踏み場所もない樣な盛況であり、殊に申込みが遲れて特三等しかとれなかつたのは遺憾であつたが、パラオ島の獨人宣教師レンゲ氏と同室し得たのは幸であつた。師は永く同島に永住し、同島々民語の辭書を編纂してをる篤志家であり同島語に就て種々有益な教へを受くる所多かつた。

東京灣を出ると間もなく右舷に煙を吐く大島を望み、次の日には八丈島を、またその翌日には小笠原の諸島を見る。海は次第に熱帶的な色調を帶び、時にスコールの襲來を受ける。十五日右舷すれずれにマリアナ群島の北端ウラカス島を見る。海中より屹立した標式的な火山は晝も白煙を吐き、火山島の素晴しい景觀を恣まゝにさせてくれた。

十六日　十一時サイパン上陸、南洋興發株式會社常務の藤田達一氏、松江社長の息一郎氏、難波ガラパン所長などに迎へられる。サイパン島は南洋の島の例に洩れずリーフに取圍まれ、その內外で水色を異にし、外洋は濃綠色、內海は美しいエメラルド・グリーンを湛へてをる。島の南にタッポウチョウといふ四百六十米餘の熄火山あり、その餘勢が北に及んでをる。斜面は殆ど切り開かれ甘蔗畑となつてをる。遠望した島の光景は全く瀨戸內海邊の島と變りない翠微であるが、南洋の風物として憧れてゐた椰子林が見えぬのは物足らぬ。

サイパン支廳の松本技手の案內で島の施設を見學する。先づ公會堂で依光支廳長の歡迎の辭を兼ねた講演を聞き、別室で晝食の接待を受ける。依

光氏は專修大學の出身、愛想のよい支廳長で、南洋が決して世人が「酋長の娘」の歌で想像される樣な椰子の葉蔭に島民が踊つてゐる所でなく、日本の產業勢力の進出した南の生命線であり、邦人の南洋に對する認識は改めて貰ひたきこと、南洋興發株式會社の產業上に於ける貢獻は多大であり、その生產する砂糖の出港稅四百萬圓が南洋廳の主要財源であり、之に依つてその財政は黑字となつてをること、南洋で成功するには赤手空拳では駄目であり、大會社の背景を必要とすること、南洋で活躍する自分達は子弟敎育の爲內地に家を持つ必要あり、また飲料水をカルシウムの少い天水に仰ぐ爲齒を惡くする傾向ある等有形無形の困難に艱ませられることなどを語り、また在來の島民は次第に邦人に壓迫され、之を北方の離島に移住させようなどと目論まれてをること、國際聯盟脫退後島民中には聯盟規約を守る必要なしとして飲酒禁止法の徹廢を要求するものあり、當局も目下考慮中なること、また島民が邦人に對し尊敬の意を表はさなくなつたといふ批評もあるが、その一因としては文化の低い沖繩移民が多く入つて來たことが數へられ、沖繩縣當局は移民をよこす前にその標準語敎育位はやつて欲しい等の意見の開陳があつた。次いで熱帶樹の美しい彩帆神社に詣り、附近の熱帶產業研究所サイパン支所で燒芋同樣に美味なパンの實の御馳走になる。此の研究所は主として糖業と關係ある甘蔗の試驗に當つてをるといふ。次に敎育方面としてサイパン公學校と實業學校とを見た。前者では島民の男童達が「靖國神社」の上手な暗誦をしてをるのを聞き、また女子達の君ケ代合唱をしてをるのに襟を正す。一般に彼等は唱歌と繪畫とに長じてをるさうであり、その巧みなクレヨン畫を土產品に貰つて歸る。後者は邦人を收容するもので南洋に於ける唯一の

中等程度の學校であり、最近昇格したとの事であるが、生徒の數も定員に滿たず、成績はなほ今後に俟つ所多しと言ふ。

サイパンの產業界の大立物南洋興發株式會社の本社と製糖工場とは、サイパン中心地ガラパン町を南に三哩離れたチャランカ町に位してをる。規模はそれほどでもないが同會社發祥の地として種々の意味で興味が深い。南洋興發株式會社々長松江春次氏が西村・南洋殖產兩社失敗の後を受け、大正十年饑餓に迫る千名の移民を救はんが爲同會社を設立し、盤根錯節幾多の艱境を切り拔けて今日に至つた經緯は、同氏著「南洋開拓拾年誌」（昭和七年）に委しい。同書は事業の上に如何に人の力が必要であるかを明示した近來の快著である。工場で汽車の運んで來た甘蔗を壓碎する壯觀を見、次に自動車を走らし、ヒナシス丘下を廻つてアスリート農場を見る。全部コンクリートで固めた素晴しい廣場である。再びガラパンに歸り、島民の住宅を訪れる。チャモロの家は石造でスペインなどの田舍家を思はせる。入口が石段で、之を上ると玄關である。中は洋式で街路に面した側はバルコン風の室となり、セレナードでも奏でられさうな構築である。導かれた客室の壁にはキリスト敎の石版畫などを貼りつけ、ピアノを置き、カーテンの垂れた側室には寢臺が設けられてをるなど仲々文化的な生活である。娘達はカトリックのスペイン尼さんの學校に通つてをり、音樂にも料理にも優れた腕前を持つてをる。チャモロはスペイン人と島民との混血族で、農業を營み、興發に土地を貸したり、家を沖繩人に賃貸したりして收入を得てをる。文化の程度は島民としては高度で、沖繩移民を日本のカナカとして輕蔑してをるといふ話は成程と肯れる。チャモロより文化の低いカナカはミクロネシア本來の土人であり、チャモロ住宅

の傍に居を占めてをるが生活程度は格段の違ひである。その家は簡單な木造改良小屋、及び椰子葉で葺いた茅屋であり、變轉して行く時勢から見棄てられて次第に下層階級に沈淪して行く傾向にある。彼等の保護は今の中に充分講ぜられなければやがて北海道アイヌの二の舞を見るであらう。海濱には支木附カヌーノび堀立式のカヌー小屋が未だ使用されてをり、カナカの女が水に入つて身體を洗つてをるのを見る。斯くして身體を冷すのが不姙の一因ださうである。

邦人及び島民の人口はサイパン支廳管内で左表の如き増加率を示してをる。

	邦人	チャモロ	カナカ
昭和十年	四一、二八七	三、二一四	一、〇八二
昭和七年	一九、八六一	三、〇七七	一、〇〇三
昭和五年	一五、六五六	二、八四六	九八三
大正一四年	五、二九九	二、五七八	九一五
大正九年	一、七五八	二、五一二	八八六

之を南洋全體から見れば左の如くになる。

	邦人	チャモロ	カナカ
昭和八年	三〇、六七〇	三、六三七	四六、四七七
昭和七年	二五、七六六	三、四八七	四六、五五八
昭和五年	一九、八三五	三、三〇一	四六、三九四
大正一四年	七、四三〇	二、九五三	四五、八四五
大正九年	三、六七一	二、八二四	四五、六八一

卽ちカナカの人口は全體として増加率極めて低くサイパンに於てもチャモロのそれに劣つてをる。チャモロ族は増加率がそれほど惡くないのは白人の血を受けた混血族として環境の變化に適合すること困難でなく、カナカ族は之に反し、純血を保つ種族として適應性なく環境の變化に順應すること困難な結果人口の増加を見難いのであらう。

最後に本島に於ける島民の文化の指導者である公教教會を訪れ、その宣教師ポンス師に遭つた。師とは印度支那旅行以來の舊知であり、非常に再會を喜ばれてゐた。その案内でスペインの尼さん

が經營してをる學校を見る。規模が極めて小さく、擴張したいが土地を得ること極めて難しいと尼さんが美しい眉を顰めて歎じてゐた。

見物が終つて興發クラブに歸り、夜松江社長の招待で島民料理の御馳走になる。チャモロの作つたスペイン風の西洋料理で、スペイン式服裝をしたチャモロ乙女達が日本婦人に交つて皿をすゝめて吳れる趣きはまことにサイパンの一夜を紀念するに相應しいものであつた。終つて更に沖繩人の料理屋に沖繩踊を見せてもらひ、興發クラブに引揚げた時は十二時に近かつた。サイパンの夜は時々スコールの音を聞き內地の高原の樣に凉しい。「避暑に南洋」といふ文句は今後の日本でスローガンとなるであらう。

七月十七日　早朝クラブを出發、サイパン丸に歸る。船はサイパン出帆直ちに直ぐ西隣に橫たはつてをるテニアン島に到着する。島は平坦な臺地が二段となつて幾度か海から隆起した珊瑚礁から成つてをることを示してをる。以前土人が住んだがスペイン人の爲に追はれ最近まで無人島であつた。此の島を開拓して今日の樣な殷盛な砂糖島と變へたのは全く松江社長初め興發社員の努力である。お蔭で今日全島殆ど靑々たる甘蔗園となり、海岸には堂々たる新式大工場の煙突が煙を吐いてをる。

興發のクラブで小憩晝食後、藤原事務長、松本庶務主任などの案內で興發の甘蔗運搬用の汽車に乘り、會社農場を視察する。マルポの丘をめぐり、燦々たる陽光を浴びて輝く甘蔗畑の中を行く。所在小作人のマッチ箱の樣な住宅集團がその亞鉛屋根を光らせてをる。又學校歸りの小作人の子供達の群が、すれ違ふ汽車を歡送する嬉しい光景に接する。驛てテニアンの背後の海を望見する丘陵に出た。Y氏はレール際に古代の土器片を拾得する。

列車線路は未だ島の北部に伸びてをるが時間がないので引返すこととなり、ソンソン町に歸つてテニアン神社に詣り、更にその附近なるタガ族の遺跡と呼ばれる大石柱列を見る。皆倒壞して今殘つてをるのは僅か二本に過ぎぬが、椀の樣な大石を戴く高さ一丈餘の膨らみある方錐大石柱は巨石遺蹟として蓋し壯觀たるを失はぬ。此の巨大な石柱の意義に就ては各人說があるが、專門のY君にその解明は一任しておかう。

斯くてテニアン見物を一先づ終了し、サイパン丸に歸り、パラオに向つて出帆する。船にはパラオやニューギニアに向ふ松江社長初め興發の社員、同じく支廳長會議でパラオに行く依光氏などが乘組み賑やかである。また日本觀光歸りのパラオの一少女が公學校の訓導に連れられて乘つてをつたので、同行のS君之をつかまへて早速パラオ語の勉强を初めだした。

十九日 朝十一時ヤップ着、此島だけは未だ南洋の面影を傳へてをる。椰子は海岸地帶に生ひ茂り、例の集會所へバイの棟の反り出した建物が海に臨んでをる。靑き入江、綠の丘、ドイツ政廳時代からのバルコニイをめぐらした鐵骨建築もよく四邊の風景と調和してをる。支廳棧橋に上陸し、ドイツ知事の頌德碑のある小公園の前を通つて支廳に至る。此處には土俗品その他の小さい蒐集が並べてある。支廳の前に盛裝した土人の男女が集り、單調なメロディイで踊を初めた。最初に女子が次に男子が二列で集團舞踊をなす。酋長が一人列外にあつて音頭を取つてをる。ごく單純無難な踊で所謂檢閲通過といふ代物らしい。然し假令どんなものでも踊を見せて貰へたのは此の島だけで、もうパラオ邊では島民は互ひに相談し合つて日本人の踊勸誘には應じなくなつてをる。此の點ヤップだけは古風を未だ保存してをるので、旅行

者にはまことに有難い島である。島民は體格よく男は犢鼻褌、女は腰簑を附けて裸で濶歩してをる。男女共手に椰子の葉で編んだバスケットを抱へ、中に石灰、檳榔子の實などを入れ、之を嚙んでは赤い唾液を地上に吐いてをる。その籠の中には赤兒を入れてをるものもある。また男子は髮に櫛を挿してをるが、踊り子の女達は頭や腕、足に色美しい草の葉を纏きつけ、また黄色の土粉を裸身に塗つて裝飾としてをる。かういふ風俗は我民俗の古風と思ひ合はせて興味ある。

踊が濟んでから吾々は海岸沿ひに石を敷いた古道を約半時間程歩き、ヤップ一と言はれるウルル村のヘバイを見に行つた。これは今から三十數年前に建てられたもので、長さ四十米、幅十五米、高さ十三米、巨大な丸太を使ひ、中には數ヶ所に爐が仕切つてある。形式に於てパラオのものに似てをるが、欄間に彫刻繪が施してなく、その代り

美しい周圍の石疊の縁に巨大な石貨が並び、内部にも所謂俵貨が垂れ下つてをるなど極めて珍奇な紀念物である。附近に男子立入禁止の月經小屋があるさうであるが案内者なく尋ねることが出來なかつた。

ヤップ島は南洋群島の中でも人口の減少するので有名な島である。政府でも病院を建て島民の女子に醫事を習はせたりして種々島民の出産率低下を防いでをる。減少の原因は大體惡疫に原因すると云はれてをるが、然しなんといつても時代の變化により住民から昔の如き活氣、希望を消滅せしめ、氣分を沈滯せしめたことなどがその人口減少の最大原因ではなからうか。今少し醫學以外に社會學的に土人の制度を調査し、その眞原因を打診する必要があらう。

廿日　正午パラオに着、海から見た景色は此の島が最も美しい。七の島から成つてをるが、南方

の島々は石灰岩質であり、水面と接する所は水蝕を受け、綠の茂み、白の岩壁、青の水色、相映じて松島の樣な好風景である。船はマラカル島南興水産工場を臨む灣に碇泊する。此處からランチでオロプシカル島の新水道を過ぎ、コロール島の波止場に上陸するので可成面倒である。然し南洋廳の新らしい築港計畫は軈て此の不便を一掃しようとしてをる。大城技手に迎へられ上陸、直ちに南洋廳に高橋拓殖部長を訪ふ。氏は最近オロプシカル鍾乳洞で發見された人骨及び遺物の調査を吾々に依囑され、田吹土木課長に同課保管中の同所發見土器を一覽させて呉れた。土器は焙烙の樣な淺くて口の廣い形式で、內外に赤で菱形聯續の模樣等を畫いた珍らしいものである。一方の端に二つの小孔が明けてあるのは、此處に絲を通して吊り下げたものであらうか。完全なもの四個、兩端の少し破損したもの一個、半分破損するもの一個、外に小破片一個が採集せられてをる。人骨は氣味が惡くてもとの島の土木事務所に返したといふので、現地調査を約して歸る。

コロールの島は流石御膝元だけあつて街路は椰子の並木を植ゑ、整然たるものがあり、相當の大商店もあり、全く內地の市街と變らない。興發クラブが滿員なので東屋旅館といふのに投宿する。

廿一日　快晴にて暑熱可成烈しい。早朝大城技手の案內で、發動機船で他の團體と共に當地名勝の一なる鐘乳洞を見る。附近は例の水青く木々綠なる勝地で、鐘乳洞といふのは海に臨んで洞をなし、船が其儘洞中に入り得るもので、透明な水は下に底を覗かせ、上に大小とりどりの鐘乳石が垂れ下り、水光陽光燦々と入り交つて寔に天下の美觀をなしてをる。次いでマラカル島に南興水產の鰹節工場を見る。海岸には小さい二十噸以下の鰹節船が幾隻も碇泊してをる。かういふ船が十二隻

もあり、毎日釣つて來る數萬尾の鰹を工場組織でどんどん鰹節に處理してゆく。內地では手工業でやつてゆくのが此處では大仕掛けな機械工業なので、內地業者は安價な南洋節の出現に飛鳴を擧げてをるとのことである。

次いでコロール島に引返し、水產試驗場を訪ふ。此處には水產標本や島民漁具がよく蒐集せられてをる。殊に興味ある研究は、空瓶の投入に依り調査した「海流調査報告」（昭和十一年十一月）で、マリアナ方面に投入したものが臺灣、沖繩、本州方面に拾はれてをる事實などは北赤道流の影響を證據だて人種移動の考　にも資することが出來よう。附近にある物產陳列場は廣く群島の產物と土俗品とを蒐めて有益であるが、專門家の指導を缺き、民族學的には甚だ物足りぬ。午前の視察は之で終了し、昌南クラブで南洋廳の晝食の接待にあづかる。午後は先づコロールの街外れなるアバイを見、島民巡警の說明を聞いた。之は史蹟名勝紀念物として保存せられてをるもので、神話傳說歷史を畫解する例の繪畫彫刻が割に鮮明に殘つてをる。かういふ彫刻は金屬器具が西洋人により輸入せられて以來のものであるといふ。してみると最初のアバイはヤップのものと似て比較的簡素なものであつたかも知れぬ。將來島民集會所が日本式家屋に改められぬ中早くかゝるアバイの完全な記錄を作りたいものである。

パラオ全島のアバイは何れも紀念物として南洋廳により保存せられてをることと東京で聞いてきたが、實際は然らず僅かに此コロールのアバイだけが保護せられてをるので、其他は全く保存が等閑視されてをるのは誠に殘念なことである。大抵のアバイはクレーマーの大著の中にその彫刻繪畫の解說が蒐集されてをる程で世界的な貴重な資料である。南洋廳でどうかかゝる土人文化の紀念物

の保護に心を止め、濫に改善を許さず、道路工事などで取壊す場合には側に移轉するなどの注意を加へて欲しいと思ふ。

次にコロール公學校で島民兒童の君ケ代唱歌、男子の日本刀體操遊戯等を參觀する。井上校長は「他校は知らず、此處では島民に日本精神を敎へ込むのをモットーにしてをる」といふ意氣込みである。島民の特技を利用した男子檳榔樹登り競爭と空瓶頭上運搬競爭とは他處では見られぬ面白味を覺えしめた。兒童の中に一見邦人と見られる混血兒が立交つてをることは各々の同情をそゝり、何れ將來考慮さるべき社會問題であることを思はしめらる。

最後に御木本眞珠養殖場を見る。峽灣の樣に狹つた水道に臨んで設けられた瀟洒たる事務所内で若い所員が「此處では黑蝶貝を以て最初眞珠を養殖してゐたが、今日白蝶貝を母貝とし好成績を擧げてをる」と縷々說明する。此の事業だけは少數ではあるが島民の勞働力を利用することが注意せられる。

廿一日より**廿六日**迄コロール滯在、此の一週間は本島調査の準備の爲に費された。その間雨多く、それも内地の樣にだら〳〵續く雨でスコール性でないのが不愉快であつた。此處に永く在住してをる加藤末吉氏の話に依ると、最近パラオの氣候が變動し、雨の降り方も違ふといふ。またコロールがすつかり日本化し、土人の存在は全く邦人の氾濫の中に隱れてしまつてをることは、此の島に於ける調査を著しく不便ならしめてをる。

パラオ到着以後、自分は風邪の氣味で二日程臥床した。S君とN君とはその間にパラオ地圖を南洋廳でひき寫しする。軍事上の重要地點なのでパラオ地圖の販賣が禁止せられてをるからである。健康恢復後予は南洋廳でその祕書課所藏のクレー

マーの「パラオ民族誌」を借覽する。それから南洋廳で從來どの程度迄アバイその他の古蹟を調査したかその書類を見せて貰はうとしたが、金井氏達の資料は其後何人も引繼ぎ整理してないらしく、殘念乍ら借覽利用出來なかつた。

南洋廳の廊下で偶然最近塾を出た南洋拓殖會社々員梶原氏に會ひ、同氏達の肝入りで廿四日當地の料亭でパラオ最初の三田會が開かれた。出席者六名。その中郵船出張所長の酒泉氏は及川教授と同期であり、南拓鳳梨會社の相談役佐藤永作氏は野球の三宅大輔氏と同期の普通部出身、然も御兩人互ひに年來の親友であり乍ら塾出身であることを今回初めて知られたといふのは奇緣である。席上松江一郎君にニューギニア同行を切に勸誘され、遂にパラオ本島島民調査の大任をS、N兩君に一任し、予だけ興發社船ヌシ丸に便乘してニューギニア視察に向ふことになつた。化科學方面の學徒としてはニューギニア入りは予が初めてであるといふ。

七月廿七日朝、S、N兩君は發動機船で本島に向つて出發する。予は松江一郎君を初め興發の大波サイパン農務長、小杉ニューギニア事業部長等と共にヌシ丸に乘組み、正午頃パラオを出帆、ニューギニアに向つた。高橋海軍武官を初め佐藤、梶原氏等の見送りあり、一同頗る緊張して憧れのニューギニアを目指して一先づパラオに訣別する。ヌシ丸は二百四十一噸のディーゼル機關附の帆船であるが、航海中機關を主として用ひ、帆は歸途に僅か助走として用ふる程度である。鐵製の堅牢な且つ美しい船で、船長の春岡乙一氏は明治卅六年に南洋貿易會社の帆船に乘じ南洋に來たといふ南海の航運史上の古强者である。右にアラカベサンの火山性スロープを仰ぎ、左に石灰岩の水蝕された岩嶼の奇觀を賞し乍ら辷る樣に西水道を

出で間もなくリーフ外に出る。流石に船が小さいので少々動搖あり、船に強くない自分は、食事は一回だけで後はニューギニアまでパンか飲物だけで濟ますといふ餘り威張れない成績であつた。

廿八日　依然として波あり、薄暮メリーの島を右舷に見る。波に浮んだ魚の樣な小島であつて、南洋神話によく見る神が天上から島を釣り上げるといふ形式が、全く太平洋々上の島生活を經驗したものでなければ味はれないことを感得せしめられる。

廿九日　波は益々高い。四時頃トコベの島に近づく。此の島も亦周圍一里に滿たぬごく平坦な島でリーフで圍まれてをる。然し周圍は全く深海なので、船は投錨不可能といふ不便な島である。折柄干潮なので島からランチを出すことが出來ず、ヌシ丸は暫く島蔭に假泊して潮の滿つる時を待つた。そして風波の爲遂に上陸は不可能となり、此處で下船する南興社員だけがボートで上陸し、その人達の手荷物及び野菜だけを辛ふじて陸揚げし、他の荷物は歸途に下すこととなり、七時出帆する。こんな島に磷鑛經營の爲興發關係の百人ばかりの邦人が約百五十人の島民と共に在住してをる。無線電信もない絶海の一孤島に、月一回か二回の船便で僅かに故國と聯絡してをる人達の生活は全く產業第一線の前衞部隊として同情を禁じ得ざるものがある。

卅日　海は漸く靜穩となり、氣候も何となく溫和となり、白い鳥が飛翔するのが見受けられた。船員達は甲板で帆布を修理してをる。今夜赤道を通過するとのことで、乘客一同も俄かに元氣となり、蓄音機を鳴らし談笑する。

卅一日　朝ニューギニアが見え出して來る。山嶺蜒々と連り、白雲之を繞り、小さい珊瑚礁の島を見て來た吾々には全く蘇つた感じがする。ニュ

ーギニアは島ではなく大陸だと或る人の語つたのも無理はない。海岸に近づくにつれ、斧鉞を入れざる密林が水際まで迫つてをる。所々にパプア人の水上家屋がポツンと視界に入るに過ぎぬ。周圍一里に滿たぬ島に營々何百人の人を盛る日本人にとつてはこの未開拓地を見ると何といふ勿體ないことだといふ感が、先づ第一に湧く。ニューギニアは我國の二倍半の面積で、人口僅か四十萬、一平方キロに〇・八人といふ殆ど無人の地と言つてよい所で、我サイパン島が一方里二千人ゐるのと比べてまさに雲泥の差である。

船はフォーゲルコップの大半島の東端を廻り、岬を廻つてドレ灣の中に入る。入口にマンシナム島及び他の一小島が横たはつてをる。その蔭に入るに流石に荒れてをる海もピタッと凪いで、靜穩鏡の如き入江である。綠の山を背にしてマヌクワリの町が面前に現れる。灣内に二隻の帆船が碇泊してをるが、共に興發の社船新舊の大東丸である。外にカヌーやボートを除き一隻の船らしい船はない。マヌクワリの港の海運は今の所日本の一商事會社が牛耳つてをるわけである。外に月に一度KPMの汽船が來て本國との聯絡をとつてをる。北部ニューギニアの中心都邑であるマヌクワリが此の狀態であるから、以てニューギニアが蘭印中の最も見棄てられた地帶であることがわからう。

半壞の棧橋を上つて上陸すると、眞正面が稅關であり、その隣の建物が興發の事務所である。フォニクス會社から繼承したもので、マヌクワリ一の地の利を占めてをると言つてよい。その先が郵便局であり、その前に海に臨んで市場が設けられてをる。その外十軒ばかりの支那人の店舗が並んでをる。これだけがマヌクワリの商業地區を形成してをる。マヌクワリに於て會社らしいのは南興を除いてはないわけである。此の商業地區を圍ん

でアンボン人、パプア人その他の住宅あり、丘陵の中腹にオランダ官吏の官舍が設けられてをる。人口全部で約一千人ごく小聚落であるが、これでもモミあたりの農場から出て來た人には極めて大都會らしく感ぜられるさうである。マヌクワリには未だ興發クラブが出來てゐないので一行は事務所と山の中腹のオランダ人のクラブ（パッサングラン）とに分宿する。パッサングランはオランダ政府官營の宿泊所で、副知事の官邸の隣に位置し、清楚な建物で、混血の老婦人一人が留守居役をしてをる。クラブの前はダラ〳〵下りの庭園を取込み、ドレ灣を眼下に見下してをる。此處から展望した眺望はまことに忘れられない印象を與へられた。灣は山湖の如き靜寂さで碧い水色を湛へてをる。之を壓するアルファク山は白雲を纏ひ、中腹より水邊まで一面大樹海が擴つてをる。未だ斧鉞を入れたことのない森林といふものは實に言ひ知れぬ魅力を包藏してをるものである。ニューギニアの樹木は實に生育が見事で、殊にその巨樹は枝葉を縱横にひろげ、その上に更に葛や種々なる寄生植物を絡みつけ、一つの木が實に一宇宙であるかの如き觀を與へる。南海の神話に於て創造された世界を樹木にたとへてをる例の多いのは全くかゝる熱帶地にして初めて考へられることである。木々には名の知れぬ鳥が囀つてをる。その中でも鸚鵡が眞白な羽を擴げて大きな聲で叫び乍ら木から木へ飛んでをるのはまことに珍奇な光景であつた。夜事務所に於て歡迎會があり、出席者邦人約十四名、全部南興の社員及びその家族であり、東京の流行歌が出て賑やかであつた。マヌクワリにこんなに邦人の集合したことは先頃の日本軍艦「沖島」訪問を除いては珍らしいさうである。

八月一日　鳥の音に依つて眠りを覺まされる。朝霧の中を螢草の如き花の咲き亂れた草道を踏み

しめ海濱に下つて貝を拾ふ。かういふ光景を何處かで見てゐたと見え、あとで興發の使用するパプア苦力などが予に珍らしい貝を持つて來て呉れたのは可憐であつた。朝食後マヌクワリの南端なる日本人墓地を訪ふ。一體ニューギニアには明治末期に支那人が移住しはじめ、次いで大戰前に極樂鳥の羽毛がパリー婦人の新流行となつて珍重せられた時、同鳥の濫穫が行はれ、一時好景氣となり、邦人なども大分渡航して來た。今日墓地に眠る邦人達は其頃の名殘で、氏名の鮮明に殘つてをるものは左の人々である。

○大日本人　中村榮吉氏墓

大正二年十月廿四日歿

千葉縣山武郡東金町田間

○故　淡路なつ墓　大正三年七月三日亡

長崎縣高來郡加津佐村　宇道原

○故　淡路藤一之墓　大正四年十二月三日

○故　森登勢之墓　大正三年九月廿三日亡

佐賀縣藤津郡鹽田村大草野

○故　野澤藤太郎之墓

○故　野澤一郎之墓

新潟縣岩船郡平林村鹽谷

○故　本間治郎八之墓

新潟縣岩船郡岩船町

○　高橋　清

少し離れて蘭人墓地あり、中に邦人の墓二基がある。一は昭和六年に妻を失つて自殺した沖繩縣人大城龜之墓であり、他は昭和八年ナビレで死んだドクトル清水和男氏の墓である。極樂鳥景氣は大戰後下火となり、殊に濫穫を恐れた蘭印政府は極樂鳥の輸出を禁止し、違犯者から千ギルダーの罰金を取るので、ニューギニアは再びさびれ出して來た。マヌクワリの邦人も大部分引揚げ、支那人丈けがなほ殘壘を固守してをつたのである。興發

がニューギニアに手をつけた際には、邦人としては細谷、齋藤などの人々が殘つてゐた丈けであり、興發はそれ等の人々の仕事を繼承し、ドイツ人の經營して失敗したナビレのダマル樹脂採取事業地を買收し、此處に大々的にニューギニア經營を開始したのである。ナビレはヘールフィンク灣の最奥で、それより四十キロメートル入つた所に三萬一千餘町歩の權利地がある。此處にあるダマール樹といふ楠に似た大木から塗料の原料、蓄音機のレコード、電氣の絶縁材料、蠅取紙等の原料となるダマール樹脂を採集するのである。然し興發は之に止まらず、ヘールフィンク灣の西岸モミに三百ヘクターの棉花の試作をやり、ニューギニア棉作の大敵である害蟲を驅除する方法に成功して良質の棉花を收穫するに至り、次いで蘭印政府より更にモミに六百ヘクターの下附を受け、本年棉花植付けが行はれたのである。又これより先北海岸のサルミにも三百ヘクターの棉作地が下附されたが、この方の試作は失敗に終つたといふ。かく着々好成績を擧げる此の興發の事業は、オランダ官民に一大センセーションを與へ、一方では日本の進出を恐れてニューギニアの防備を固め、日本勢力の伸展を妨げる手段を取りはじめ、また一面では日本と提携してニューギニアを開發すべしといふ議論も擡頭してをる。何れにしてもニューギニアの開發は可能なりといふ認識が興發の事業の成績に徴してオランダ人の間に高まりつゝあるのは愉快である。彼等は最近飛行機に依る空路地圖の製作とか油田や金鑛を求むる地質調査などを大々的に行ひ、ニューギニアの富源を闡明しようと勉めてをる。

蘭印政府はニューギニアをジャヴの過剰人口の捌口としようと企ててをり、その爲マヌクワリ附近にも蘭人及び印歐混血人の移民事業が行はれて

をる。然し附近に農作物の市場のない土地に於ける大資本を背景にしない農業經營なので政府から補助金を受けてをるに拘らず皆失敗に歸してをるのは致し方ない。

此の日午前ボートでマヌクワリの對岸なるサンゲンの砂濱に上陸し、海濱のパプア人や移住マレイ人の小屋を見て後林中に入り、印歐移民の住宅を視察した。彼等は原始林を切り拓き、タピオカやパイナップル、珈琲などを植ゑつけ、また傍らに小牧場を有してをる。かういふ移民はマヌクワリのそばに約五十戸位は存在するさうである。彼等は獨身の場合ＡＢＣの等級に分ち、Ａは月十ギルダー（一ギルダーは我二圓）、Ｂは七ギルダー五十仙、Ｃは旅費丈けを政府から支給される。また既婚者の場合は月二十ギルダーを補助される。然し事業は大抵うまくゆかぬので恩給で食つてゆく樣な人達が主に移民となつてゐるといふ。土地は最初二年間位は無償で、後は次第に租借料を拂ひ、次第に自立する立前であるといふ。然し此の位の移住で何日の日にニューギニアが全部開發せられるかは疑問である。山林中にはなほマネキョン族の耕した芋畑がある。それは林を燒いたあとに芋を植ゑるのであり、土地が痩せれば又他に移轉する原始方法であり、女子が耕作に當つてをる。歸途道ばたの畑の傍に土人を嚇かす爲小さい竹の筒の兩端に赤布を張つて吊り下げてあるのを見る。赤い色が未開人を恐れさせしむるのであらう。歸りは陸路を取り再び日本人墓地のそばに出て宿舍に戻つた。

八月二日　大東丸附屬のモーターボートでマンシナム島に行く。灣内の清澄な水を切り乍ら辷る樣に島に近づいてゆくと、魚が水をはねて逃げる。椰子の茂つた砂濱にパプア人の部落を見つけて上陸する。パプア人はいづれも陸から危かしい棧橋

を渡り入口に達する水上家屋に住み、日を遮つた暗い室内に數人の家族が群居してをる。彼等は貨幣價値を知らぬので土俗品を購入する時いろいろ滑稽を演ずる。通譯してくれるK氏の話に依ると最初弓矢を三十五錢では賣らぬと頑張り、それでは二十五錢でよいかといふとすぐ承諾したといふのである。小さい銀貨より多くて大きい白銅貨の方が悅ばれるのも面白い。マンシナムの島は對岸の土人が歸服する迄オランダ人が居を構へてゐた所であり、今も木造の教會、蘭人墓碑などが殘つてをる。墓の一つには一八八六の年號があつた。四邊には椰子が高く聳えて日を遮つてをる。海濱で椰子の實を取つて貰ひ、その水を飲んでをる時、パプアの一老人が牧師の演說の如き身振りで島の歸屬を論じ、此島は曾つて英人の所有であつたが今は蘭人のものであり、將來日本のものになるべきだなどと親日的口吻を洩らしてゐた。土人は小兒の樣に他愛のないものではあるが、彼等でも兎に角國際的關係を少しく理解し、我國に好意を持つてをることを知ることは、吾々としては興味ある事實であつた。一體ニューギニアに來て我南洋よりも愉快なのは、土人が日本人と見ればタベ・トアン（今日は、旦那樣）と挨拶することである。彼等は決して支那人にはトアン（旦那樣）と云つて挨拶しないさうであり、日本人の優秀性はよくわきまへてをるのである。ニューギニアの島民といへば野蠻な人喰人種の樣に傳へられてをるのは間違で、彼等とて普通の人間であり、その種類及び文化は樣々で此方の態度に氣を付ければさまで心配はないとのことである。サルミの農場で夫君が調査旅行に出られて居る間、社員の妻君は僅か女性二人丈けで留守を守り、五ヶ月間何等の恐怖を感じなかつたといふ。土人としては寧ろ我南洋島民などの方が日本人になついてゐない感があ

る。之は種々の原因もあらうが考ふべき問題であらう。

此の日夜半十二時に大東丸で南興の社員一行はモミに向ふ。之を見送つて小舟で大東丸まで行つた。大東丸はアンボン人達の船員に依つて操縱される百噸ばかりの舟であり、甲板には土人のデッキ・パッセンジャーが一杯である。一體蘭印政府は日本のニューギニア進出を恐れ、いろいろの制限を加へたが、その一つに日本の船舶のニューギニアに於ける沿岸貿易を禁止してをり、興發の事業地連絡の船も蘭旗を飜し、百噸以上の船なる場合は蘭人船長を、以下の場合は土人の船長を雇はねばならぬ規定になつてをる。蘭人船長の俸給は馬鹿に高いので、興發は大東丸を百噸以下の船に改造し、アンボン人の船長を雇つて航海させてをるのである。その外外國よりニューギニアに來る外國船の噸數も二百四十噸代のヌシ丸を標的とし、二百七十噸以上の船の入國を禁止してしまつた。此の馬鹿げた法令が出たのは此の二月のことであるといふ。その外最も現在に於て日本を困らしてをるのは外國人入國者制限法であらう。興發はパプア人アンボン人の勞働者一千人以上を使用し乍ら之を監督する日本人僅か廿數人しか入國を許されてゐないのである。

蘭印の制壓政策にも拘らず興發の仕事が現在に於て疲弊せる島民を物質的にうるほしつゝあることは事實である。失敗したマヌクワリなどの印歐移民が會社の農場に入らんことを求めてゐるといふことを聞くのは甚だ愉快である。蘭印政府もモミ農場の成否に關心を持ち、農業牧師にその視察を命じてをり、今度もその技師の一人は此の大東丸に依つて矢張りモミに出張するのであつた。外國の領土、然も尙世界の秘境として知られてをる地方に於て我同胞が粘り强く艱難と打ち戰ひつゝ

歩一歩その經濟的開發に貢獻しつゝあるのは吾々にとつて實に感銘深き狀景であつた。ボートで大東丸に乘組む時、大波氏は興發の社歌を唱へ社員之に和し、空には南十字星が燦として輝く闇の海上に植民第一線に赴く人々の意氣は天を衝く慨があつた。

八月三日より**六日**迄予はマヌクワリ附近を歩いては土人から土俗品を蒐集した。マヌクワリ市街の住民はアンボン、ハルマヘラ、その他東印度諸島より移住せるもの、及び混血人（ハーフカスト）、支那人等から成つてをるが、その傍らに在來のパプア人が住んでをる。彼等はもう古物類は宣教師の言ひつけに依り棄てゝしまつたなどと稱し、固有の物質文化を失つてをるが、それでもサゴの匙とか土器、木器、箸などは集めることが出來た。面白いのは該品所有者の不在の場合は之を手放すことなく、また假令貝のやうな小さいものを賣つた小兒へも一々その歩合を分ち與ふるなど、所有の觀念の明瞭になつてをることであつた。

海岸に住んでをるパプアが比較的體格もよく文明化されてをるに比べて、山地から來る所謂マネキョンと呼ばれてをる連中は、背低く手足は細く痩せ、營養不良な體格で前跼みになつて歩いてをる。大抵一家揃つて町にやつて來て、支那人の店舗の前に集つてをる。男も女も袋を肩に掛け、また額に引つ掛けて背に負つてをる。彼等は我々を見るとオド〳〵して避けるが、男は弓矢槍を持ち、腰に山刀を挿してをるので、山間で逢ふと此方も可成薄氣味が惡い。然し別に危害を加へる樣なこともない。マヌクワリの市街でその一女子が道端に落ちてをる花片を拾つて食してをるのを見たが、何だか可憐な氣がした。その顏面を見ると☼型の文身が施してある。彼等の皮膚は堪へ難い異臭を放ち、むつとして近寄り難く、またフランベ

シアなどの皮膚病患者が多い。天與豐かな大自然の中に居て、何が彼等をして斯く體格不良ならしめたるか反問せざるを得ない。

一體未開人が文明人と接觸した場合その生活狀態が不良となり、人口が減少するのは一般の通則である。然しこのマネキョン族の如きはそれ程文明の侵入に煩されてゐるとは考へられぬのにかくの如き狀態にあるのは何故であらうか。ミクロネシアに於てもヤップ島は邦人により產業的に開拓せられる所最も少く、從つて邦人の人口が少いのに島民の人口最も減少の傾向を示してをる。恐らく人口減少には各種族內在の諸原因あり、必ずしも文明人との接觸に主要原因を歸せられぬらしい。サイパン島に於けるカナカが比較的人口增加してをるのも日本人との混住が必ずしも彼等に致命的でないことを語つてをる。

マヌクワリ附近の土人から集めた土俗品にもいろ〳〵珍しいものがあるが、何と言つても最大收穫は南興社員天羽兵太郎氏から、そのホランヂア方面旅行の際得た土俗品全部を一括して寄附して戴いたことである。之は何れ圖集として發表するつもりである。

その中センタニ湖北岸イファル・ブサルで酋長から購入せられた長槍は長さ五・八二米の長大なもので土人はこの中央をもつて投げるのだと云ふ。またホランディア地方アルソー人が陰莖に挿込み裝飾とする瓢簞は長さ一三cm、幅七・五cm、上に美麗な渦卷模樣が刻まれてをる。同じ目的に使用せられるへちまは英國境に近いスコー人の使用するもので長さ一三・四cm、幅五cmである。前者は土人が木製笛の音と共に之をもつて腹帶と擦り合せて奇怪な踊をなすのであると云ふ。

また石斧も數多く寄附され、その中エングロス採集の長大なものの一は長さ三〇・四cm、幅九c

mであり、イファル採集中位のものの一は長さ一八cm、幅五・四cm、ニンボーラン採集の小斧の一の長さは一三・五cm、幅五・三cmである。何れも蚊紋岩の如き極めて美麗な硬き石より成り、土人に聞くと此石の原料はトアン（貴方）の國から來たと云ふとの話である。その他珍しい土俗品を多く寄贈され、之にマヌクワリ附近で集めた土俗品と合せ、短い滯在ながら夥しい土産物を船に積込んでニューギニアを去ることが出來たのは幸ひであつた。

六日　夕刻六時廿分、ニューギニアに再來を約し、パラオに歸航するヌシ丸に乘じてマヌクワリを出發する。同行は社員前田氏及び天羽夫人だけである。丁度陽が落ちて夕燒けが赤く天を焦がしてをる。殘る人、去る人、ハンカチを振つて暫しの別れを惜しむ海面には夕闇が既に濃く迫つてゐた。歸りは波穩かで、此度は食堂に缺かさず出ることが出來た。

八日　朝トコベ島に着き、ランチで上陸する。先づ興發の事務所を尋ね、藤澤氏の案内でトコベ人形製作者であるバイリベリといふ老人を尋ねる。トコベの家は石の上に杭を立て椰子葉で壁や屋根を掩ふた苫屋である。丁度今カトリックの宣教師が渡島し、今日も教會で說教してをるとかで、島民は皆外出し、老人も不在であつた。彼が人形を製作する場所を見たが、居宅の入口に面し板敷の上に踞して氣の向いた時仕事してをるらしい。傍らに鐵の斧や切出しの類の道具が置いてある。トコベ人形の材料は黑柿の木であり、鸚鵡貝を割つた片を以て目玉とし、タマナ樹と木炭とを混じたもので瞳を作るのである。老人の外その技を傳ふるものに若者二人あるが、之も仲々仕事をせず、結局此の人形作りの傳統は近い將來に絕滅してしまふだらうと言はれるのは殘念である。現在パラ

オ邊の土産物屋に氾濫してをるトコベ人形は、パラオアラカベサン山麓に移住してをるトコベ人移住民の模造するところで眞物ではない。トコベ人形は本來近親者の死んだ時之を紀念して作るものであり、もとは位牌の如きものであつたらしい。更にトコベ村落の北方に赴き、說敎を聞いてゐた村長に遭ひ、その所藏品を分けてもらつた。此の島に於けるカトリック布敎は新しいが然しその影響は著しく、土人の着てをる服裝も一變して洋風が取入れられてをる。土人の婚姻惡風の改善にはキリスト敎會の貢獻が幾分認められよう。然し日本人達は宣敎師が土人の蓄積を神の名で洗ひざらし持つてゆくと言つて非常に憎んでをる。

歸航の船にはそのスペイン宣敎師初め多くの興發の社員達、並びに一噸も重量があると思はれる大豚などと同船することとなつた。此の豚が積込みの際海の中に飛び込み、島に向けて泳ぎ出し、之を追ひかけて又引き揚げるといふ滑稽な事件あり、午前十時半漸くトコベを出帆する。追手なので帆をあげて走り、船の搖れ方は減少する。氣候も少し暑さが增し、且つスコール性となつて來た。九日には速力が早過ぎ夜半にパラオに着く憂ひがあるので、帆の助走を止めた。そして十日の未明パラオに入港する。然し檢疫が遲れて上陸は十時になつた。此の日コロール滯在中のN君はS君の嚴父の訃音を受取り、之を本島旅行中の同君に渡す爲に朝出發したので、遂に行き違ひになつてしまつた。然し翌十一日には兩氏もコロールに歸り、それに天城丸に依り歸國の豫定であつたY氏が、同船の航路變更に依り思ひがけずパラオに來航されたので、此處に一同が再び揃ふこととなつた。そこで評議一決し、明日皆で第三回のパラオ本島調査を決行する事とした。

十二日　十時コロール波止場出發、西廻りの發

動機船でガクラオに向ふ。パラオは今高瀬貝の大獵やコプラの高價で景氣がよい。その饗宴に招かれたコロールのパラオ人達が土産を澤山持つて船に一杯乘つてをる。西風を受け、船は少しく動搖したがさしたることはない。海岸にはごく低い山が連亙してをる。N氏は西南海岸地帶を見、此の山脈を横斷して東海岸に出づる計畫をたてアイライで下船した。爾餘の一行はガクラオで上陸する。此處の突堤には島民が多く迎へに出てゐたが、邦人の姿は見えぬので仕方なく小學生に荷物を持たせ村吏事務所に運ばしめる。ウリマンの公學校々長九鬼氏及び小原訓導、リガン助敎がわざ〳〵途中迄出迎へられ、古老を呼んで途上の記念物を說明してくれたのは有難かつた。ガクラオからの途中に入江に面した船着場の如き構築あり、其處にアバイ、カヌー小屋などが設けられてをる。古老の說明によるとカヌーの舳先に附けてある飾はタマデッキ(かはせみ)を表はし、また支木の先端の「海兎」といふ白い子安貝の飾はショウショウといふ空を飛ぶ白い鳥を表はしたものであるといふ。此處にも鳥舟思想が現れてるのが面白い。パラオ式のカヌーの外にトコベ式カヌーが最近模倣利用されてをるといふ。カヌー小屋の傍に石垣を廻らした十字型の低い壇があり、中央に木が植ゑてある。古老の說明に依れば、之は休み場アイリウドであるといふ。四隅に休み石と稱する立石が立つてをるが、今は一つを殘すのみである。またその向ひアバイと並んで周圍一間半の石垣で區劃された方形の地あり、その上に人面を彫刻した石柱が內地の道祖神の如くに置かれてをる。パラオの民は兎に角石を巧みに處理する技能を具へてをる。

此處からダラ〳〵の敷石道を登つてウリマンのアバイに達する。中年者のアバイと古老のアバイ

と二種あるが、比較的保存がよい。その周圍には敷石を敷きつめ、その緣の所々に立石がある。集合者の重立つたものが座る時之に凭れるのだといふ。此處には馘首して來た首を乘せる石の臺があり、昔の殺伐さを偲ばせてゐた。次に村長の家を訪ひ、土俗品を分けてもらふ。その家の前に累代の墓地があり、その石を積み、上に巨石を横たへる墓の形式は文化移動史の上で興味ある研究對象である。ウリマンでは御大典紀念に建てたと云ふ村里事務所に宿る。これは旅行者の實費宿泊所の用に立つてをるもので三人位が泊り得る板敷の室であり、持參の毛布で一夜を過す。食事は島民の土人が米を炊いで呉れ、氣の置けぬ愉快な一夜を過すことが出來た。夜附近の古老達を集め、リガン助敎の通譯でいろ〳〵の土俗を質問する。アバイを建てる場合、酋長の葬式の場合の他部落の協力が極めて大なることは面白く感ぜられた。古老

達の居なくならぬ中に島のあらゆる舊事を採集することは絶對的に必要である。

十三日　朝ウリマン附近の古蹟を見る。古いアバイの取拂はれた跡に立石だけが殘り、いろ〳〵の傳說を傳へてをる。たとへば山上の舊村から持ちおろした石であるとか、神の憑る石であるとか云ふ類であり。クレーマーがかういふ石をザーゲン・スタインと呼びづけてをるのも尤もである。さういふ話を採集してをる中に時が經ち、十一時に漸くウリマンを出發する。途中にも矢張り同じ樣な古蹟あり、供物臺の樣な小ドルメン、カイバックルの砥石に使つた石などが殘つてゐた。ガクラオを過ぎオギワルに至る途上の風景はよい。廣く平坦な椰子下道を歩いて行く氣持は實に快適である。入江を見晴す海濱の小屋で晝食を認める時辨當箱がなかつたので一行は飯を葉の上に盛り手掬みで食ふなど古風の食べ方を味ふ。實際文明と

未開との區別は紙一重である。

オギワルに着いて小高い丘の上に宣教師レンゲ氏の宅を訪れた。氏が自ら建てた家であり、パンも自分で燒くのであるといふ。土人に伍して簡素な生活を營むドイツ式の不撓不屈の精神には尊敬に價するものがある。お茶の御馳走になり、長時間に亙り談笑し、マルキョクまで道遠き故急がねばならぬと忠告されて漸く神輿を上げる。此處に久しく在住するレ氏は島民の怠惰と性的放縱と飲酒との三缺點を改良すべく努力してをる。然し南洋廳が島民の飲酒を許したことは非常な打擊であり、今後極力之と爭ひたいと言つてゐた。邦人の中に宣教師達の如く島民を理解し、その爲を思ふ人の少いのは殘念である。日本は世界に發展せんとしてをるが、對土人關係にどれほど優秀なる植民的能力を發揮し得るか疑はざるを得ない。日本の宗教界の沈滯せる今日、外人の布教師と拮抗するためには、せめて公學校教育の擴充、島民の文化研究の機關の設置等に今少し留意することが必要であらう。

オギワルを出てから餘り變化のない道を急ぎ、入江の口に築いた突堤の上でマルキョクに先着し迎へに出たN君と遭ひ、暮れかゝる頃マルキョク村に入つた。此處でも村吏事務所に泊る。此處の事務所は海濱に面し、昨日より大きな建物で氣持がよい。今晩は所々に島民の饗宴あり、古老達を集めるのが稍々困難であつたが、それでも夜遲く集つて來た人達を相手に、通譯をたよりにS君は盛んに質問の矢を放つてゐた。

十四日　朝烈しいスコールが來る。支度が出來て外に出ると發動機船が豫定より早く來着したので、急いで乘込まねばならなくなつた。お蔭でマルキョク見物は不可能となる。船はバベルダオブ島の東側を廻り、一路コロールに向ふ。カイシャ

ルで本島視察から歸るトラック島、ポナペ島等の支廳長達の一行と一緒になつた。斯くて度々スコールに襲はれつゝ船は正午コロールの波止場に歸着し、再び興發クラブの客となる。

午後は附近の重要遺蹟の撮影をなした。コロール波止場の際にカヌー小屋が二棟あり、その兩入口の左右の柱に男女の彫像が刻まれてゐる。波止場に近い方のカヌー小屋は頗る宏壯な建築であり、波止場に面した入口の右の方が男體で、面部が水色で口部の輪廓が朱で彩色せられてをり(挿圖參照)、左の女體は鼻が赤く面部が白く塗られてをる。なほその反對方向の入口の梁にも三十三個の人面が彫刻せられてをる。此類の彫刻は土人の彫刻藝術を語る興味ある遺品であるが、建築物が腐朽したり、颶風で倒壞したり、また都合により取拂はれたりするとそれと共に消滅してしまひ、未だ彫刻物を保存する手段が講ぜられてゐないのはまことに殘念である。曾つてコロール波止場の突端にあつた人像柱はミクロネシア民族誌や南洋廳施政十年史の寫眞に姿をとゞめてをるものであるが、同波止場の改修工事と共に消滅してしまつたのはまことに惜しい。早く博物館でも設けてせめて彫刻部分だけでも適當な保存法を講じて貰ひたいものである。

次に撮影したのはパラオ支廳の入口前の築山の上にある石の首であり、ロタの金井氏の說明を聞くと、之は迷信の偶像として警務の人が島民から押收したものであるとのことであるが、恐らく本島に多く發見せられるアバイなどの附近にある人像柱の類ではあるまいか。高さ四六cmであり、その中人面部の高さが三三cmで、その上部の冠樣の石の高さが一三cmである。また正面の幅が一九cmで側面の幅が二四cmである(挿圖參照)。あまり大きいものではないが、種々の點から興味が

深い。金井氏はこの像は饗宴に物を運ぶ女の狀を表はしたものであると云はれたが、恐らく頭上の石は最初冠樣のものを表現したものであり、島民が由來を忘れてから別種の解釋を施したものではあるまいか。一體石の人面像を立てる習慣はイースター島にひろがる風俗であり、然もその巨石人面像は冠樣の石を頂いてゐたのである。イースターもパラオのものとを比較するのは形の大小から云つても甚だ大膽ではあるが、ポリネシア文化はもと西方よりミクロネシアを渡つて東方に赴いたと考へられるので全然關係がないと斷言すること能はず、何れ將來の精査を必要とするものであらう。

次いでアラバケツの方面に赴き、土人部落に於て島民の祠堂を見る。之は民族學者の所謂 Ahnenhaus であり、家の造りが我國の小祠に似てをるのが興味深い。ドイツ人の統治時代此種の祠堂の破壞を命じたのに之だけは密林の中に隱れて發見されるに至らなかつたのであると云ふ。土人の宗教的記念物として極めて尊重すべき建物であるが勿論何等保存の方法は講ぜられてをらない。たゞ側の家にをる老人が此祠堂の守をなしてをるのみである。最後に物産陳列館に行きパラオ人の往古の饗宴に使用された巨大な木造容器を撮影する。未開共産時代の部落を擧つての大饗宴には巨大な木器が必要とせられる。丁度石に於て巨石文化がある樣に木に於ても巨器文化が存在した譯である。

十五日　快晴なので辨當を持參し、アラカベサン島に遠足を試みる。同島にはコロールより突堤が出來て地續きとなつてをり、島の端に出來てをる南洋廳の水上機飛行場まで自動車を飛ばすことが出來る。飛行場の傍で自動車を乘り捨て、それから引返し乍ら附近のトコベ島民の移住地を見物し、次いで右側の傾斜面を攀ぢ登り、山の頂上に

出た。上は島民の墓地になつてをるが、西水道を足下に見下す眺望は絶佳である。海岸の側方に下り、鰹節を製造してをる沖繩縣人の海岸部落を通過しコロールに歸つたのは午後二時頃であつた。

十五日より**十九日**迄コロール滯在、歸國の準備に日を送る。その間十六日にY君と共にオロプシカル鐘乳洞の再調査をした。同洞窟は先月廿六日に一度調査したのであつたが、今度專門のY君が見えたのと、この前には滿潮で下部が水についてゐた爲充分調べ得なかつたからである。オロプシカル島はコロールのすぐ前に横たはつてをる島である。新波止場から荷足ですぐ對岸の新水道擴張工事中の事務所に行き、その裏の岩山を百六十歩程行くと鐘乳洞に達する。入口は東に面し、約十五歩位の廣さである。入口から大變な急斜で下に下り、右に屈折してをる。約百十歩ばかり下に降ると底部に達する。此處は干潮でも海の水が滲透

してをり、殊に蝙蝠が住んでゐて異臭が鼻を突き氣味が惡く、全部の調査は困難である。此の水に接する附近の岩間に人骨が幾つも散らばつてゐたのである。此の鐘乳洞は今年の五月に南洋廳土木課職員が港灣工事作業の爲新水道附近の岩山を調査した際發見したものであり、中に前述の皿と頭蓋骨四個、其他の人骨部分を發見し、之を土木課に持ち歸つたのである。六月十二日附のパラオ發行南洋新報は、之を先住民族の遺物として紹介したが、果して之が先住民族のものか、また比較的近世にヤップ邊から來たものの遺骨であるか、尙研究を要する問題である。Y氏は流石專門家だけあつて方々の隅を探して尙多くの土器片、腕輪、ウドウドに似た遺物等を採取され、また人骨殘片を拾得された。とにかく此の洞穴の遺物はパラオ史を研究する上に重要な材料であることは疑ひない。

今日南洋廳に保存せられてをる同洞窟發見の皿

の大いさは左の通りである。一は徑三八・五ｃｍと三八ｃｍで中及び底に赤き縞線が彩色されてをる。高さ九ｃｍ、一方の端に九ｍｍの穴二つあり、兩孔の間四・五ｃｍである。二は徑四一・五ｃｍと四一ｃｍで高七・五ｃｍ、内部と底部とに復合菱形聯續模樣が赤く彩られてをる。皿の側面と下部とに鐘乳石が附着してをる。これにも兩孔あり、その徑五ｍｍで、穴と穴との間は五・二ｃｍである。三は徑三八・二ｃｍと三八ｃｍで高さ九ｃｍ、前者に似た菱形を半切した模樣を鋸齒形に聯續させた圖案である。兩孔間三・八ｃｍ、穴の徑は六ｍｍである。四は徑三九・五ｃｍに三九・三ｃｍであり、兩端が破損してをる。高さは八・五ｃｍ。五は徑四九・五ｃｍに三四ｃｍの不完全な皿で赤色に塗られてをる。六は徑二九ｃｍと三二ｃｍの破片で高さ九・五ｃｍ、赤く塗られてをる。

發見せられた人骨中南洋廳土木課の所有に歸してをる頭骨が四個あり、調査報告起草の必要上その一個だけ東京に持ち歸ることを得た。之は長頭に屬し、外傷癒着の跡が見えてる。爾餘の人骨は將來南洋廳に於て建設せらるべき博物館に蒐藏せられるとのことで今なほオロプシカル島新水道工事事務所に保管されてをる。頭蓋骨の外に下顎骨斷片が三、四個、長管骨が五本位蒐められてをる。齒は檳榔樹を嚙んだ爲染つてゐたが拔齒の跡はない。此等の遺骨は早く適當な所に保管して保存を計りたいものである。

パラオではその外なほコロールのカトリック敎會を訪ひトコベから同船したスペイン宣敎師に遇ひ、その布敎狀態を尋ねた。カトリックは主としてパラオ島の南方に勢力を持ち、信徒數は約二千人で北部の新敎と對抗してをる。此處の師父は餘り外國語に通せず、通譯を介して談話した。その態度は極めて消極的であり、言葉の不疏通から日

本人との間に誤解の生ずること多く、自分等の跡は邦人宣教師に地位を讓りたく、今その養成を計つてをると語り、島民アルコール飲用許可問題に就て意見を問ふと、島民にとつて飲酒は極めて自制し難きものであり、結局之により借財が增し、土地を手離し、滅亡の外なかるべく、然し自分達は無力で今の所如何ともする所ないと長嘆息をしてゐた。

なほコロールの公學校で井上校長を問ひ、島民教育上の問題に就て種々高見を拜聽する所あつた。島民の傳統を保存することは彼等の爲或程度まで必要ではなからうかと云ふのが自分の考へであるが、實際家の經驗から云ふとなかなか簡單に理論どほりに行かず、舊習保存と改善との限界點を明瞭に立て得ない樣である。

此處には更に木工徒弟養成所があり、修業年限二ヶ年で各島から島民の補修科卒業生中優秀な者

を集め、簡單な木工技術を修得せしめてをる。此種の程度の學校が島民の教育に最も適當せるものらしく、內地の高等教育を受けた島民は皆失敗に終つてをると云ふ。

パラオ調査はこれで大體打切り、十九日午後出帆のパラオ丸で歸路に就くことになつた。歸りの船も相當に滿員で、出征者も交り、大變な歡送である。

歸途ヤップ島では前回に見られなかつた公學校を見、その合同體操と話方發表とを參觀した。短い觀察ではあるがヤップの公學校生徒達はパラオのそれほどインテレクチュアルでは無い樣な氣がする。

テニアン島では二本椰子附近に散步を試み、Y氏が先日發掘した石柱列址を見る。附近には土器片貝斧片などが多い。石柱の大いさはソンソンの巨石柱ほどのものでなく、之を住宅柱址と考へる

Y氏の意見に成程と首肯される。折柄スコールに遇ひ、灌木の下や甘蔗畑の中に隱れたがついにづぶぬれとなつてしまつた。夜は興發クラブに宿し、慶應出身者達の歡迎を受ける。メラネシア土俗品の大蒐集を殘した例の小嶺磯吉氏の息實氏は矢張り塾員で此島に南興社員として元氣に活躍してをられる。

サイパン島では難波氏の案内で前回見殘したタナパコの島民部落を見、電信山にドライブして島の大觀を恣にし、次いで島の向側、ドンニーまで赴いて引返した。歸途參觀した南洋タピオカ會社の工場では我史學科出身の大塚氏の岳父が經營の衝に當つてゐられたのは奇緣であつた。從來タピオカ澱粉の製造はあまり好成績でなかつたが南洋廳の土地貸與により漸く近來輓回の機運が見えると云はれる。本島はタピオカの成育に適してをると見え、山地には立派に成育したタピオカの青々した茂りを見ることが出來た。

此處でも夜は興發クラブの厄介になり、また慶應出身者達の厚い歡迎を受ける。

旅行中支那の事變は漸次擴大し、南洋にも戰時氣分が波及して來た。かくて廿六日サイパン出發廿九日横濱に歸着した時は、日本は出發前と變り、召集者を送る國旗が街路にはためき、國民の注意は支那方面に轉じられてゐた。（終）